

3. イチゴ子苗定植法における花芽分化促進のための断根処理			
[要約]			
イチゴ子苗定植法における花芽分化促進のための断根処理は、培地利用年数にかかわらず、窒素切断開始ごろ（8月中旬）と9月上旬の2回行うのがよい。			
研究室名	野菜・花研究室	連絡先	0869-55-0271（内線 235）

[背景・ねらい]

岡山農試式高設栽培では、空中採苗した子苗を発根させ、そのまま定植する子苗定植法を行うため、育苗・定植の省力・軽作業化が可能である。しかし、子苗（花芽未分化）定植法では、花芽分化を早め、開花を揃えることが重要となる。

そこで、花芽分化・開花を促進する技術を確立する。

[成果の内容・特徴]

1. 断根処理方法として、株の周り半径 5 cm 程度をプランターの底まで半円状に切断した。
2. 1年目培地、5年目培地ともに、1回の断根処理（8月12日）で開花期はほとんど早まらなかったが、2回の断根処理（8月12日、9月4日）によって開花が促進された。なお、5年目培地の2回処理区の開花は、1年目培地の無処理区と同程度であった（図1、2）。
3. 1年目培地、5年目培地ともに2回の断根処理によって無処理もしくは1回処理に比べて1月までの商品果収量は増加し、全期収量も増加した。商品果率に差は認められなかった（図3、表1）。

以上のことから、2回の断根処理は、培地利用年数にかかわらず開花促進及び初期収量、全期収量の増収効果があると考えられる。

[成果の活用面・留意点]

1. 培養液濃度は、定植（7月中旬）から8月10日まで E C 0.6dS/m、8月10日から花芽分化期（9月中旬）まで原水（E C 0.3dS/m 以下）のみ、花芽分化期以降 E C 0.6dS/m で管理することを前提とする。
2. 今後、断根処理時期や断根処理に伴う体内窒素の変化について検討する必要がある。

[具体的データ]

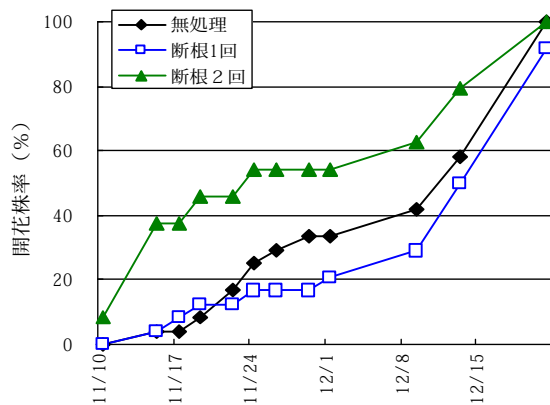


図1 1年目培地における開花株率の推移

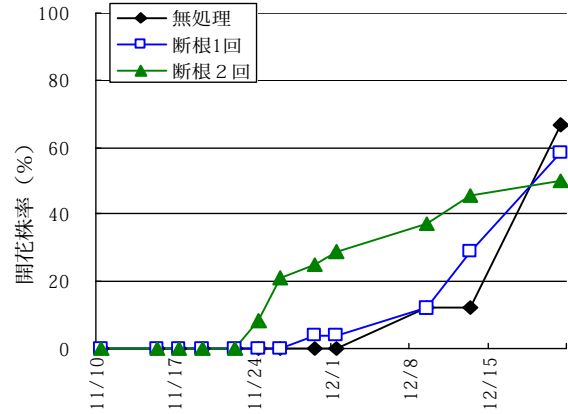


図2 5年目培地における開花株率の推移

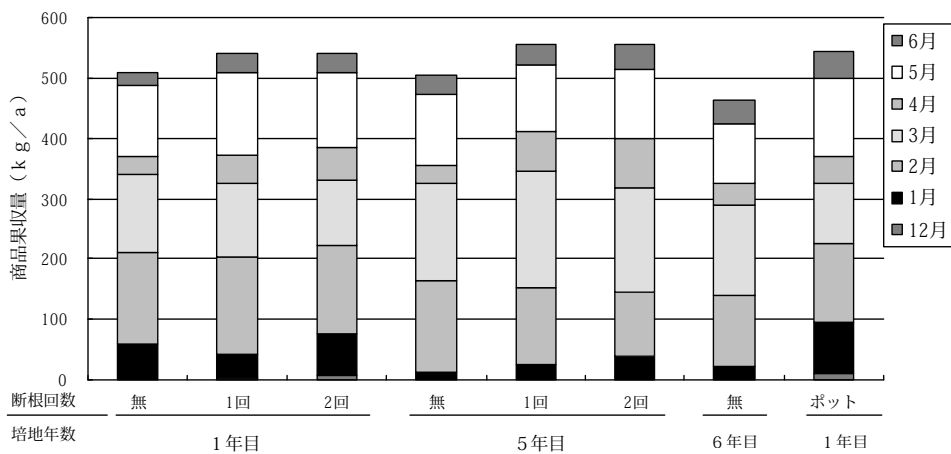


図3 断根処理が商品果収量に及ぼす影響 (とよのか)

表1 断根処理が収量に及ぼす影響 (とよのか)

培地利用年数	断根処理	頂果房果数 (個)	1月までの商品果収量 (kg/a)	同左比 (%)	全期商品果収量 (kg/a)	同左比 (%)	全期全果収量 (kg/a)	同左比 (%)	商品果率 (%)
1年目	無	19	59	100	510	100	555	100	92
1年目	1回	21	42	71	542	106	597	108	91
1年目	2回	20	77	131	541	106	590	106	92
5年目	無	21	12	20	504	99	560	101	90
5年目	1回	17	24	41	556	109	608	110	91
5年目	2回	17	39	66	557	109	607	109	92
6年目	無	17	23	39	462	91	504	91	92
1年目	ポット	16	95	161	545	107	577	104	94

[その他]

試験研究課題・事業名：軽量培地を用いた簡易な高設栽培方式の確立

予算区分：受託 (超省力園芸)

研究期間：平成9～12年度

関連情報等：平成9年度試験研究主要成果：イチゴの簡易高設栽培装置

平成9年度試験研究主要成果：イチゴの簡易高設栽培による省力的栽培法

平成11年度試験研究主要成果：イチゴの子苗定植法における花芽分化促進技術

平成11年度試験研究主要成果：イチゴ高設栽培における簡易培地加温法